



OECD Future of Education and Skills 2030  
第6回グローバルフォーラム

# 未来をつくるチカラを学校に

OECDティーチングコンパスに向けて  
2024年10月10日(木)～13日(日)

6th Global Forum on the OECD Future of Education and Skills 2030  
The OECD Teaching Compass: Empowering Students and Teachers

# 第6回 グローバルフォーラム

## 概要

21世紀の教師と生徒に必要なチカラをはぐくむ ラーニングコンパスをより確かに ティーチングコンパスの共創	3
教師という存在に向き合う4日間	5
サイトビジットと全体会議	6

## サイトビジット

仙台   AIとSTEM・STEAMの教育的活用	7
戸田/東京   インクルーシブでイノベーティブな教育	8
能登   非常時における教育と創造的復興	9
群馬   社会情動的学び	10

## 全体会議

全体会議のキーワードは、インタラクティブな対話	11
未来の教育へ、1分間のメッセージ	12
「もしも」の備えをみんなで考える 非常時のための教師サポート	13

# 第23回 OECD/Japanセミナー

## 基調講演

Education 2030/2040へ OECDティーチングコンパス	14
求められるのは社会変化を伴う教育改革 その礎となる、次世代の3指標	16
OECDティーチングコンパスにつなげる日本からの提言	18
日本の教育をもう一度価値づける 知・徳・体にわたる全人的な教育	20

## パネルディスカッション

教師のエージェンシーは、自律力と不可能を可能に変える力	21
対話から学ぶ時間を残しながら、生徒が自己主張できる環境を整える	22
学校で起こり得るあらゆる事態に、アダプタビリティで対応する	23

## スペシャルセッション

先生のキャリア・パス～海外編～ 派遣教員OB・OGの今	24
-----------------------------	----

# 21世紀の教師と生徒に必要なチカラをはぐくむ

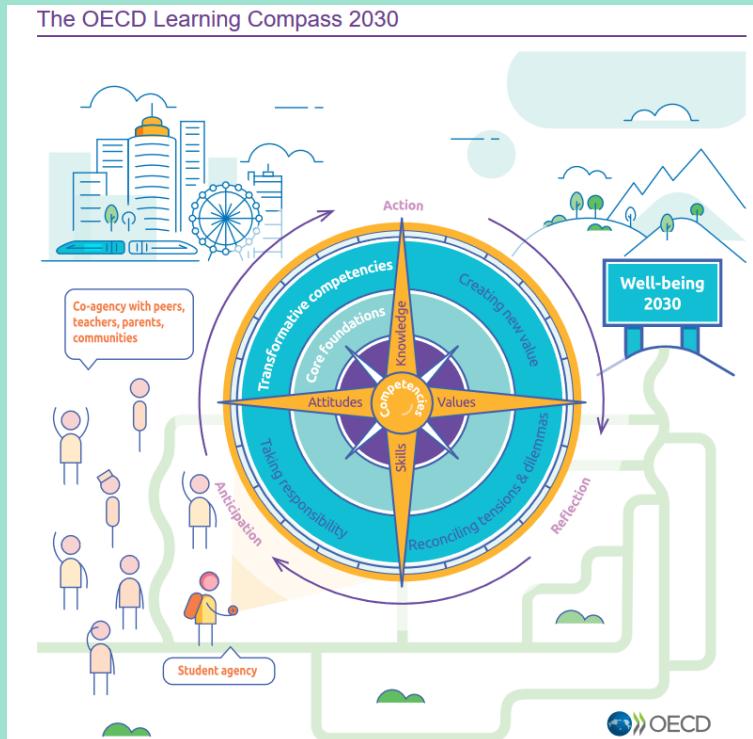
OECD Future of Education and Skills 2030\*（以下「OECD Education 2030」もしくは「E2030」と表記）は、よりVUCA（不安定性、不確実性、複雑性、曖昧性）が加速する21世紀において、生徒がより良い未来を創造するためには、どのような知識・スキル・態度と価値が必要なのか、そしてこれらを育成するためには、どのような教育制度・学校・授業・カリキュラムが必要なのか、その実装や評価に関しても、国を超えて新たな知識を共有し共創しています。

\*2025年1月から「OECD Future of Education and Skills 2040」に名称が変更されています。

## マルチステークホルダーによる国際的プラットフォーム

OECD Education 2030 グローバルフォーラム（以下「グローバルフォーラム」と表記）は、教育のカリキュラムデザインとその実現・実装分野で活躍する、教育関係者やコミュニティなどのマルチステークホルダーによって構成される国際的なプラットフォームです。

これまでに、新しい学びの枠組みであるOECDラーニングコンパス2030（以下「OECDラーニングコンパス」と表記）を、政策立案者、研究者、校長、教師、生徒など、国境を超えたマルチステークでの対話を通して共創してきました。この枠組みは、生徒たちが2030年以降もより良い社会を生きていくために必要な、生徒のエージェンシー、生徒のウェルビーイング、コンピテンシー（知識、スキル、態度と価値などの資質・能力）を提案しています。



## ラーニングコンパスに込められた意味

ラーニングコンパスという名称には、生徒が、未知なる環境の中でも自力で歩みを進め、責任意識を伴いながら意味のある方法で、進むべき方向を見出すという意味が込められています。

# ラーニングコンパスをより確かに ティーチングコンパスの共創

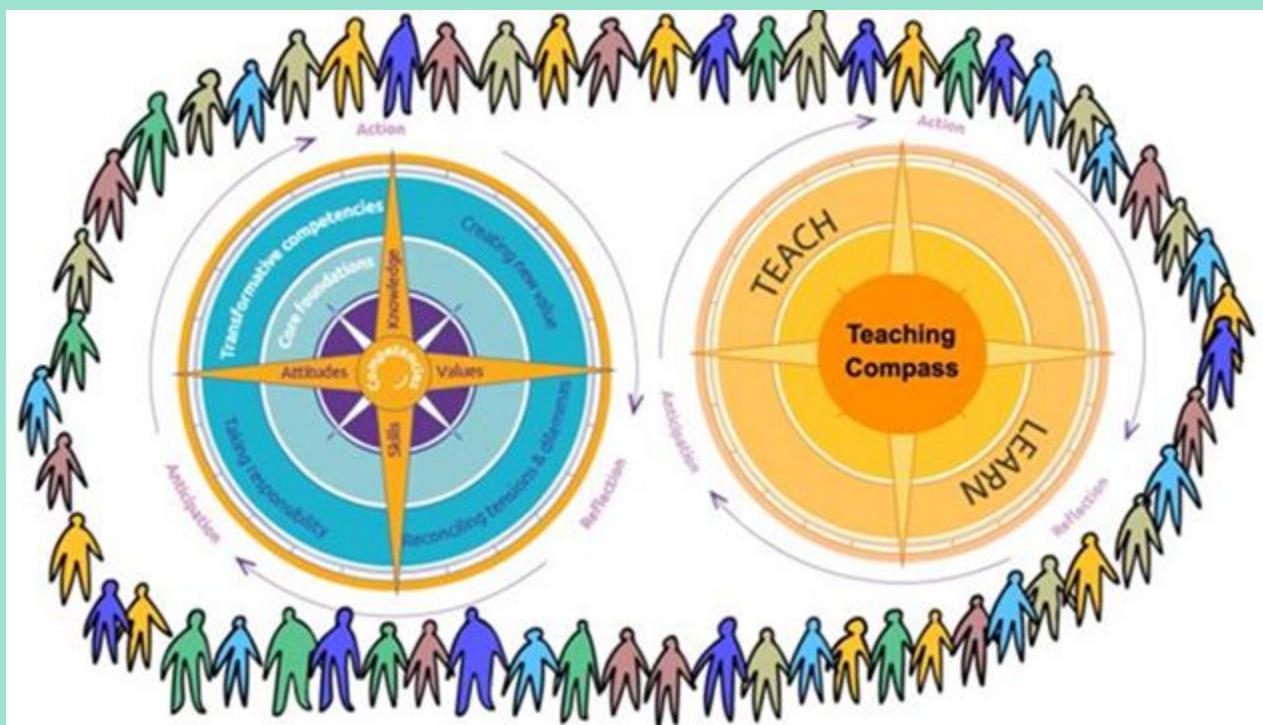
日本がOECDに加盟し60周年の節目に、第6回グローバルフォーラムは日本で開催されました。

現在は、OECDラーニングコンパスが実際の教育現場でより確かに実現・実装されるよう、OECDティーチングコンパスの共創に取り組んでいます。VUCAの時代に、OECDラーニングコンパスは「生徒が、何を・何のために・どのように学ぶか、どのような力が必要か」を指示する役割を持ちますが、OECDティーチングコンパスはその対となり、「生徒のより良い学びとウェルビーイングのために、教師はどのような資質・能力が求められるか」を指示する役割を持っています。

今回のグローバルフォーラムでも、OECDラーニングコンパスの対となるOECDティーチングコンパスの共創に向けた対話を重ねました。

## ミラーリングの関係性

OECDラーニングコンパスとOECDティーチングコンパスは、  
対となり相互に作用し合う、ミラーリングの関係性です。  
また、生徒も教師も、生涯を通して学び合い、学び続けることを示唆しています。



# 教師という存在に向き合う4日間

生徒がつくりたい未来に向けて歩みを進めるために、教師という存在は必要不可欠です。しかし同時に、教師不足は多くの国々で深刻な課題とされており、さらにVUCAに対する柔軟な向き合い方と早急な対応も引き続き急務であるため、これまで以上に世界的な関心を向けて解決していくことが重要です。

グローバルフォーラムは、教師であることが何を意味するのかという本質的な問いや、教師が持つ役割、そしてそれが生徒だけでなく教師自身にどのような未来をもたらすかを再考する機会であります。

OECDティーチングコンパスの立案プロセスでは、教師のウェルビーイングやエージェンシー、教師の知識・スキル・態度と価値といった主要コンセプトへの理解を深め、国境を超えて共創することで、国際的なフレームワークとなることを目指しています。

## OECDティーチングコンパスで包括したい5つの柱



# サイトビジットと全体会議

今回のグローバルフォーラムは4日間にわたり開催されました。

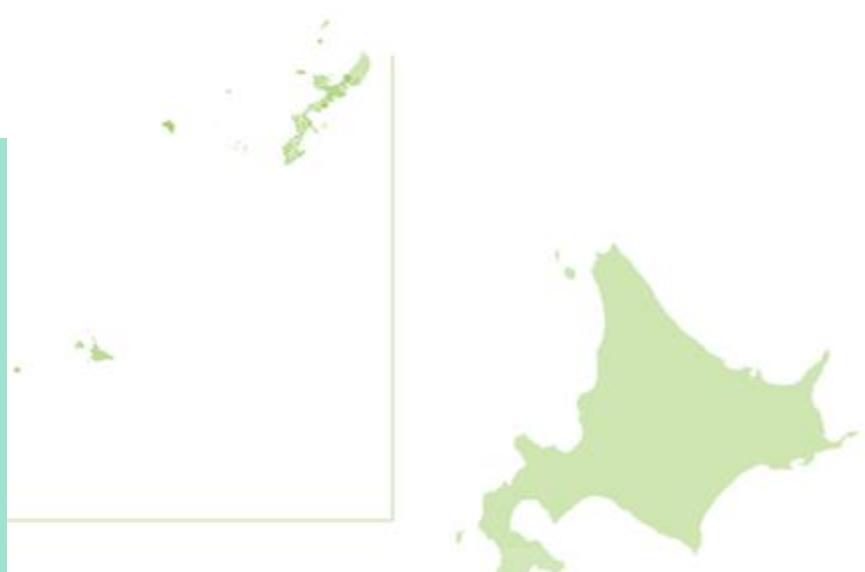
4つのテーマに分かれて日本各地の教育現場を視察するサイトビジットと、1か所に集結し全員で対話する全体会議の2部構成という初の試みに挑戦しました。

Day1 - 2のサイトビジットでは、仙台・戸田/東京・能登・群馬の4地域に分かれ、それぞれの地域に合わせて設定された、政策に関するテーマに沿って知見を深めました。そこで得た知見をDay3 - 4の全体会議に持ち寄り共有することで、インタラクティブな対話を生み、OECDティーチングコンパスへの、全体のより深い理解と成果につなげました。

## Day1 - 2

### サイトビジット

仙台・戸田/東京・能登・群馬の国内4地域に分かれ、視察を行いました。OECDティーチングコンパスに必要な主要コンセプトが、教育現場でどのように実現・実装されているかを視察し、教師・生徒・教育委員会・研究者・支援企業などとの対話を通して、知見を深める機会としました。



OECDティーチングコンパス共創に向けて、各サイトで取り組んだテーマ

## Day3 - 4

### 全体会議

国内4地域に分かれていた参加者が、仙台の東北大連にて一堂に会しました。サイトビジットで得た知見を持ち寄り、共有し合うことで、さらなるインタラクティブな対話を生み、OECDティーチングコンパスの共創につなげました。



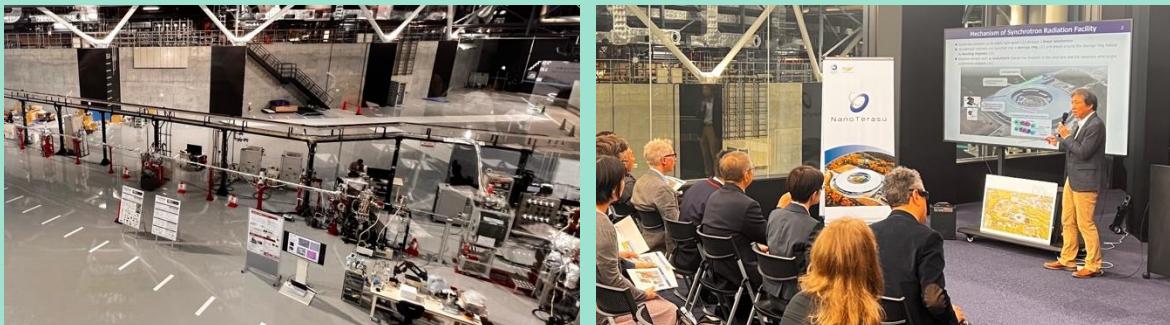
## サイトビギット 仙台

# AIとSTEM・STEAMの教育的活用

教育におけるAIとSTEM・STEAMをテーマとして、東北大学が保有する世界最高水準の先端大型研究施設である3GeV高輝度放射光NanoTerasuの視察や、教員志望の大学生・大学院生によるワークショップを実施しました。さまざまなステークホルダーによる発表と対話を重ね、未来の教育を考えました。

### 東北大学の巨大顕微鏡 NanoTerasu

ナノ世界を観察できる世界最高水準の先端大型研究施設NanoTerasu。巨大顕微鏡とも称されています。類似施設では通常立ち入れない範囲まで見学することができ、共同研究のための利用が推進されている様子を体感しました。エネルギー、材料、デバイス、バイオ、食品などの産業領域において幅広く利用される可能性と事例の説明を受け、最新技術の产学連携による利活用にとどまらず、学校教育組織が具体的にどのように活用できるのか、準備や企画の必要性が話されました。



### 寺子屋から考える令和の教育

教員志望の大学生・大学院生によるワークショップが開催され、教育や福祉という枠組みにとらわれず存在していた寺子屋の観点を、AIとSTEM・STEAMという現代的なテーマと統合し、未来の教育についての対話が重ねられました。デジタルとアナログを通した参加者間のブレインストーミングがなされ、例えばVRを用いて歴史から体験的に学ぶ機会に関するアイデアが生まれました。現代社会の課題に実感を持って向き合えるという効果が期待されます。



# サイトビット 戸田/東京 インクルーシブでイノベティブな教育

戸田市は「教育を科学する」をコンセプトに、産官学連携により実社会の技術を教育現場に取り入れています。生徒を伝統的なルールや教室という箱に詰め込むのではなく、特性に合わせて大きな風呂敷で包み、インクルーシブ教育を行っている学校の取り組みに触れました。さらに、教育現場に、AIを始め様々なテクノロジーを提供している内田洋行社とインテル社に訪問し、視察内容を振り返り、学びを深めながらOECDティーチングコンパス立案につなげる議論をしました。

## エビデンス重視で教育を科学する

「教育を科学する」を教育改革のコンセプトとして掲げています。これまで、教師の経験や勘を頼りに現場を運営する傾向がありました。しかし、経験や勘は属人的で言語化しにくいため共有されにくく、教師自身の授業スタイル等が改善されにくいという課題がありました。そこで、データに基づき教育を科学することで、教師個人の知見や感覚を見る化し、様々な事象を予測することを目指しています。それにより伝播力が強くなったため、よりサステナブルでよりインクルーシブな教育体制を実現できつつあります。



## 多様な生徒を包み込む学校の意思

視察先では、教師の方針や教室という箱に生徒を入れるのではなく、教師が多種多様な生徒を包み込む風呂敷の役割を全うするという運営方針や、個別最適な学びをスローガンとして掲げ、生徒ひとりひとりの学び方やペースを尊重する様子が見られました。様々な困難を抱え支援を必要とする生徒への対応としては、テクノロジー活用や教師間での知見共有が重要です。



## AIは教師の業務過多を改善するか？

教師の作業の中にはAIで代替できるものも多く、業務過多の改善に有効です。しかし同時に、教師自身がAIの不確実性を理解し、AIに頼り過ぎることなく、情報の良し悪しを判断できなければなりません。そこで、教師が学び成長できるように、教師同士が学び合う機会や、産官学連携による教育現場に留まらないアクティブラーニングの場が求められます。また、教師が学ぶ過程を通して、AIの活用法等をより正しく教えられるようになることが必要という主張もありました。



## サイトビギット 能登

# 非常時における教育と創造的復興

生徒がエージェンシーを発揮できる環境の実現・実装には、大人と子どもの間にある見えない壁や、生徒の発言機会の確保、教師の負担軽減などの課題が伴います。教師がサポートを求められる環境や制度・設備、学校内外のステークホルダーとつながる重要性などが議論され、災害時の教師と生徒の関係性も言及されました。また、輪島高校の平野敏校長より「地震や豪雨が続いても何度も何度も立ち上がり、半島の最先端から世界の最先端を目指す」という発言もありました。

### 教師の役割を見直してみる

大人と子どもの間に壁がある、生徒が主張できる機会が少ない、教師が生徒に本音を話しにくいなどの課題を踏まえ、輪島高校では生徒企画として屋上から生徒や教師が自らの想いを叫びました。主張しやすい学校や社会をつくるにはどうすればいいのか、教師の役割とは何かについて議論しました。例えば主張のためのツールとしてのAI活用や、生徒の想いを受け止める教師や教育行政の重要性についても話し合われました。また、緊急事態発生時と復旧・復興過程では、復旧・復興拠点としての学校運営、生徒の心のケア、教育継続の工夫など、通常業務の枠組みを超えた負担が教師にかかってしまいます。この課題に対して、教師同士や多職種の専門家、地域、教育行政などの連携を強化できるような仕組みづくりや、全てを抱え込む教師像の問い合わせが重要であるという意見がありました。

### 国内外でつながれる社会をつくる

教師にとって世界とのつながりも資源になることを体感できる場になりました。特に、災害を経験したトルコの学校と輪島高校とのさらなる連帯の意志が互いに示され、創造的復興や災害時の教師のケアについても意見交換がなされました。また、国内外とのコミュニケーションを通じて、復旧・復興のポジティブな様子を伝えられる、被災地としてのネガティブなイメージを払拭できるなど、様々なプラスの効果に関する意見もありました。

### 教師と生徒のウェルビーイング

教師と生徒の両者にとってのウェルビーイングを実現するために、学びの文化と環境を根付かせる重要性が主張されました。生徒自らが課題を見つけ、考え、自由に取り組める、失敗が許容されるなど、柔軟な居場所を教師と生徒が共につくることも有効であると話し合われました。



# サイトビギット 群馬 社会情動的学び

群馬県は、エージェンシーを発揮する自律した学習者の育成にむけて、社会情動的スキルをはぐくむ教育（SEL）に力をいれています。教えられる“taught”ではなく、生徒が自ら獲得する“caught”と言われるSELを進めるために、教師が何をすべきか、教室やカリキュラムの中で生徒がエージェンシーを発揮する機会をどのように提供できるのかについて考える場が提供されました。

## ファシリテーターやガイドとしての教師の役割

知識を一方的に教えるのではなく、生徒が自らの興味に基づき探究できるようサポートし、生徒が学びの主体として考え方行動する環境を整える、ファシリテーターやガイドとしての教師の役割が定義されました。また、失敗を許容し学びの過程で生徒が試行錯誤できるようなサポートも重要とされ、教師が生徒と対話し共に学び成長する姿勢が必要であることや、教師のストレスが生徒に伝搬することも紹介され、全ての教師が元気に生徒を支えられるような職場環境の整備や教師への支援も重要であることがわかりました。

## 二項対立を超える“connecting”

生徒中心の学びを目指し、教育委員会は県全域の学校長とビジョンの話し合いや共有をしてきました。生徒のエージェンシーを育む学び変革を行っている学校もあります。生徒がエージェンシーを発揮する学びへの希望を表明する一方で、教師も生徒も受験への圧力を感じていることから、社会情動的スキルを育むために、学力だけでなく個人そのものの価値が認められる評価を、多様なメンバーで模索し続ける必要性が話し合われました。また、“connecting”をキーワードに、認知能力と非認知能力、生徒と教師、学校と家庭のような二項対立でなく、様々な要素が相互に関連していることを捉え考えるべきであるとまとめられました。

## 共に学び共に成長する

教師は、生徒に選択の自由や自己決定、他人と合意形成する機会をつくる姿勢が求められます。これにより生徒との信頼関係が深まり、学習意欲向上にもつながります。しかしすでに上下関係が確立されている学校の中では、生徒が意見を述べ、生徒と教師が同等な立場で対話することそのものが難しいという主張もありました。多様な人材が集まる柔軟な対話の場であるからこそ、生徒がエージェンシーを発揮できようになるのではないかと教師間で振り返りがなされました。



# 全体会議のキーワードは、 インタラクティブな対話

Day1-2のサイトビジットから得た知見を持ち寄り、Day3-4は全体会議を行いました。

全体会議では、グローバルフォーラムの共催の代表である東北大学の小嶋秀樹教育学部長・教育学研究科長より、日本のAI・テクノロジー教育に関するCultural Touchのトークも行われるとともに、サイトビジットの報告がされました。また、各地域で得た学びをいかにOECDティーチングコンパスに反映させられるか、インタラクティブな対話を通して模索しました。

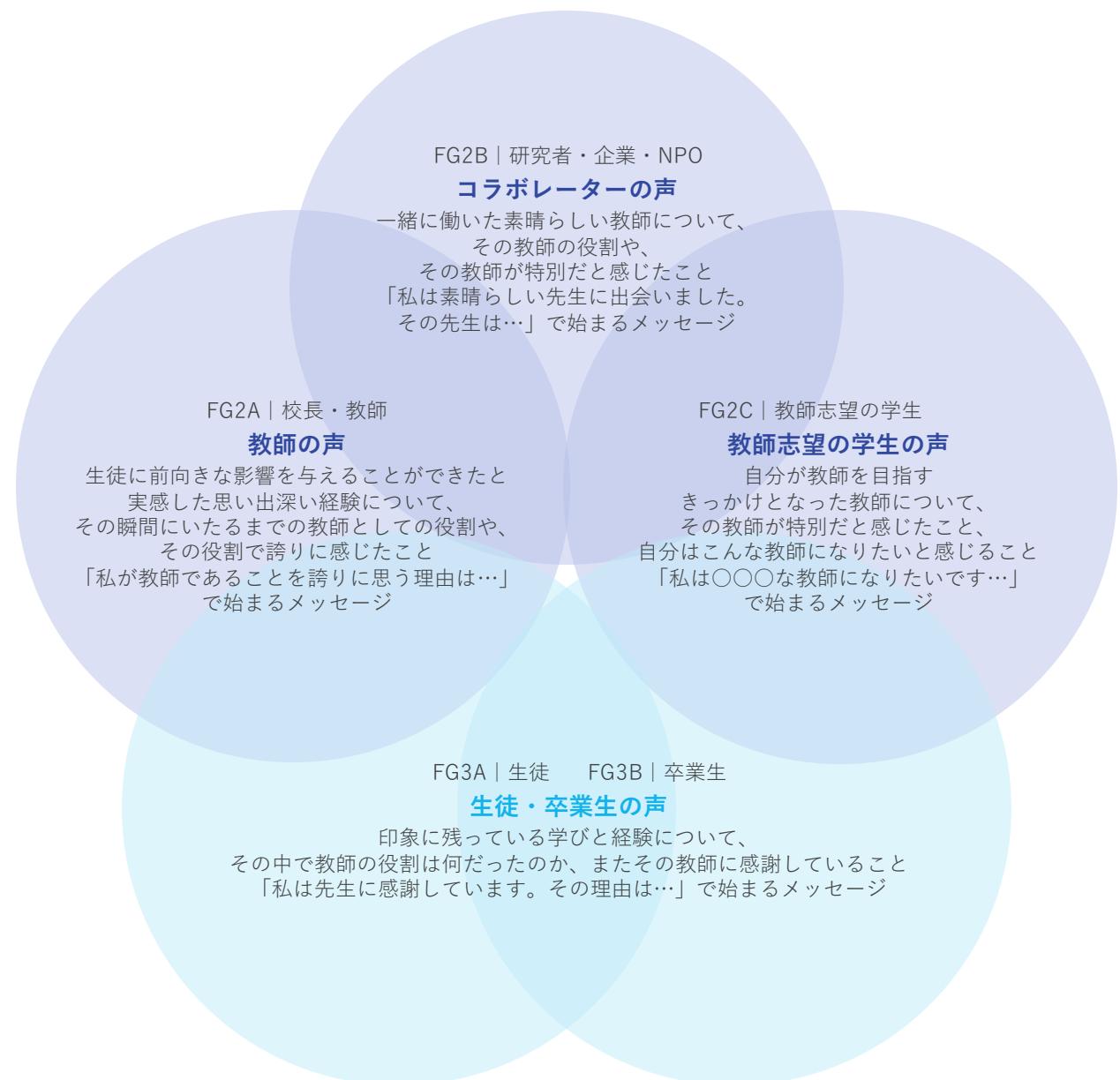
OECDラーニングコンパスと同様に、多様な視点を取り入れ国際的に活用できるOECDティーチングコンパスになるよう、政策立案者・研究者・校長・教師・生徒・財団・民間団体など、様々な形で教育に関わるマルチステークホルダーで対話することを重視しました。

参加者の属性ごとに分類されるフォーカスグループ（以下「FG」と表記）セッション、属性を越えて対話するミックスグループ、全員が一堂に介する全体セッションを繰り返すことで、インクルーシブかつユニバーサルなOECDティーチングコンパスへのアプローチも考えました。



# 未来の教育へ、1分間のメッセージ

参加者それぞれの属性で分類されるFGごとに、**未来の教師と望ましい教育をテーマとして○○○の声キャンペーン**を1分間のビデオメッセージに収めました。



## コラボレーターの声

私は高校時代に素晴らしい先生に  
出会いました。その先生は、生徒  
ひとりひとりに常に高い期待を持ち、  
生徒が自ら社会を理解し、自身の学びに  
どう活かすかを考える  
環境をつくることで、サポートしてくれました。  
(Leslie Loble  
| 研究者・オーストラリア)



## 教師志望の学生の声

小学生の時に、悩みごとを同じ気持になって考えててくれて、楽しい  
ことは一緒に楽しんでくれる先生  
がいました。それがきっかけとなり  
教師を志望しています。いつも  
笑顔で、一緒にいるだけでもハッピー  
になれる先生になりたいです。  
(福本莉佳子 | 学生・日本)

# 「もしも」の備えをみんなで考える 非常時のために教師サポート

自然災害や気候変動、生成AIの非倫理的使用やサイバー攻撃、地理的・政治的な紛争、いじめや不登校など、学校内外で発生する様々な非常時において、学校や教師が避難場所や管理者としての役割を求められることがあります。さらにVUCAが加速することで、その必要性はより強まることが考えられます。

世界各地のどの学校でも直面しうる緊急事態のシナリオに備えるために、過去からの学びや今日の取り組みを結集し、教育の未来や教師の役割の変化、教師を支える次世代の連携方法などについて、改めて想像し考えるセッションを設けました。

実際に起こった複数の緊急事態に対応してきた教師の生の声を聞き、それを元に参加者が対話を通してコアとなる共通の特徴を見つけ出すことで、緊急事態発生時の危機管理としても活用できるOECDティーチングコンパスの実現・実装につなげました。よりインタラクティブな対話を促すためにオンラインツールを使用し、参加者それぞれが考える重要なキーワードを収集できる環境を整えました。

## 例) Scenario 1

気候変動などの影響により、  
あなたの学校が、洪水・竜巻・津波・地震などの予期せぬ自然災害により多大な影響を受けるとします。



## 基調講演（第23回OECD/Japanセミナー）

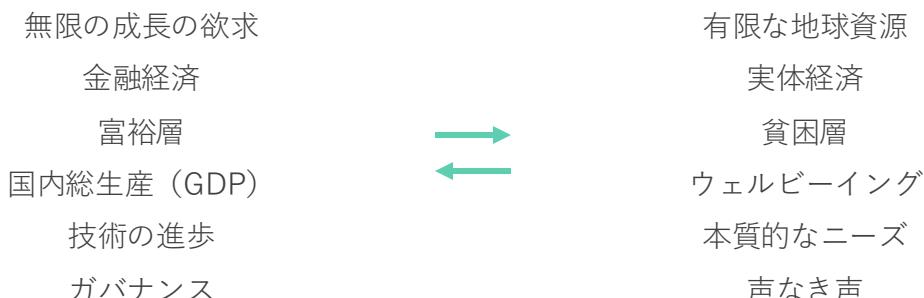
# Education 2030/2040へ OECDティーチングコンパス

アンドレアス シュライヒャー

OECD教育・スキル局長

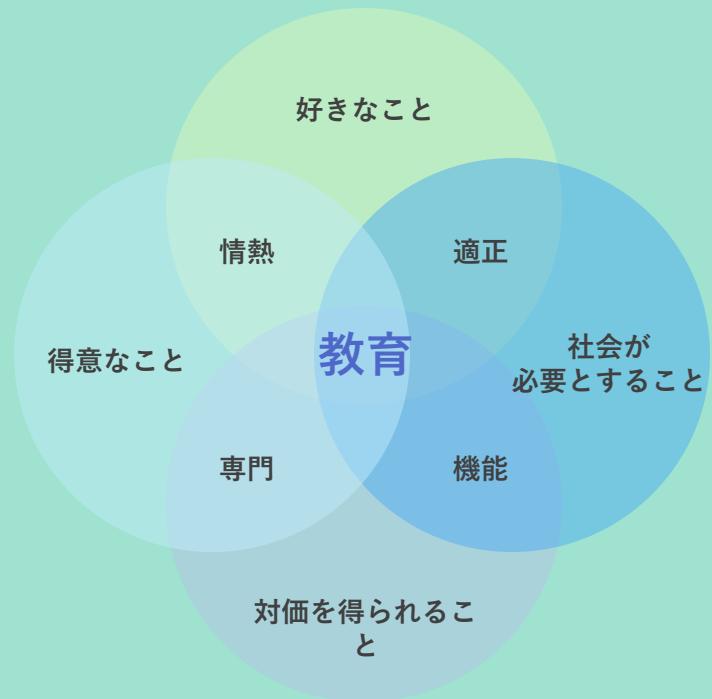
文化、言語、社会環境、技術など、教育の産物は社会の中にたくさん存在しています。その点では、**教育は社会を築く礎**であり、**OECDティーチングコンパス**は、**未来の教育を実現・実装する強力なツール**ともなり得ます。しかし同時に、現在の教育が生み出した社会には、乖離や分断も存在しています。

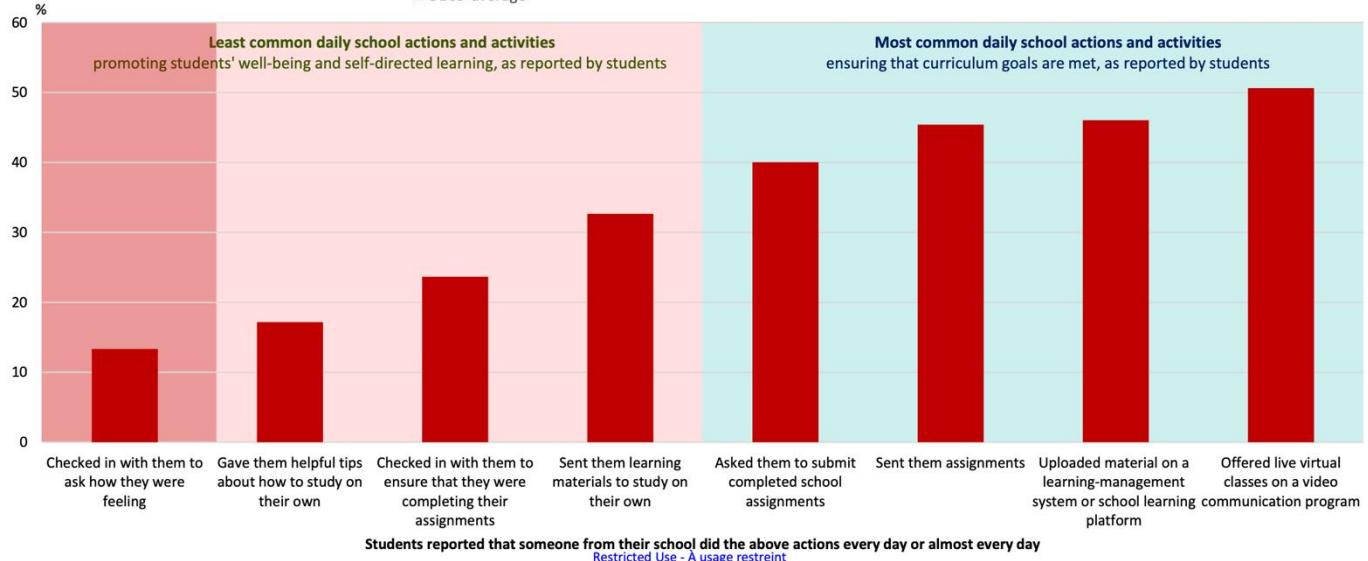
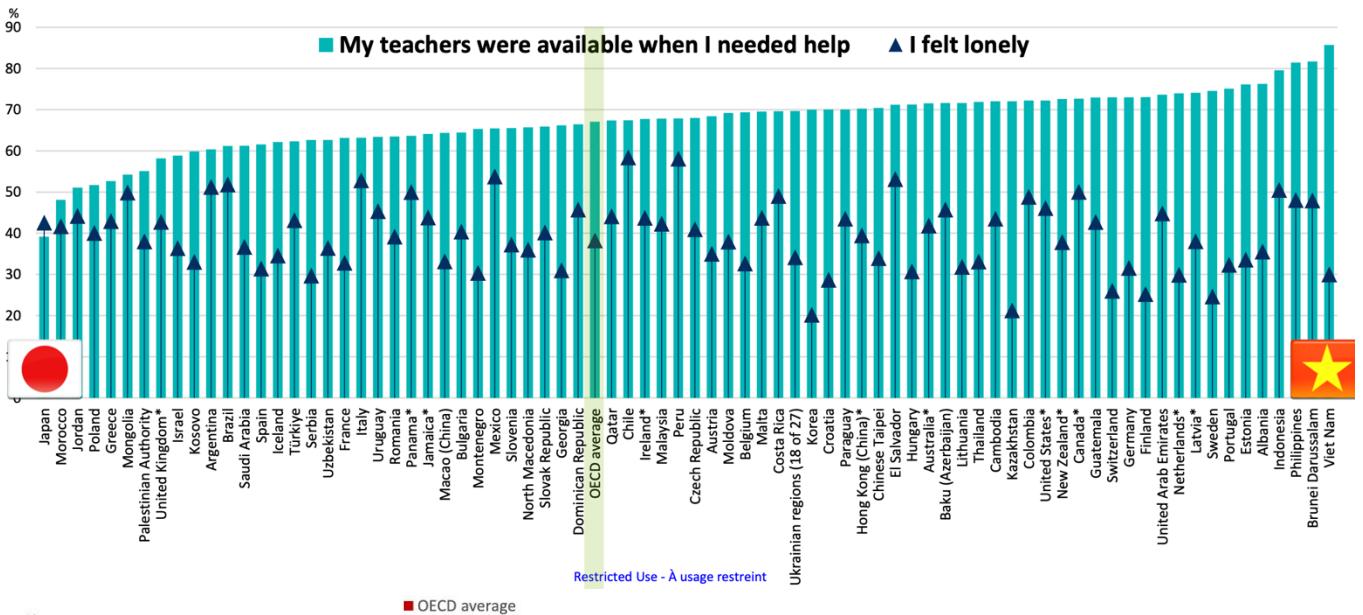
### 社会の乖離や分断



### VUCA時代、教師の知識は、どう伝えるかよりもどう活かすか

ルーティンでまかなわれるスキルやタスクは、AIによる再現性が高いため、デジタル化や自動化が容易です。さらに今後も日々進化し続けるため、代替される可能性はより高まります。その点で、ただ知っていることに対する価値は減少し、知識をどう活用できるかの重要性が高まります。また、不確実性が高い世界に生きるレジリエンスと、調和を保つサステナビリティの、バランスを柔軟に取り続けることも必要です。こうした世界の中で教育や教師ができるることは、生徒ひとりひとりが、好きなこと・得意なこと・社会が必要とすること・対価を得られることの融合点を見つけるサポートをすることです。





## 教師のエージェンシー 共同エージェンシー 集団エージェンシー

教育や教職に対する思いや情熱だけでなく、目的意識、意義、職業的アイデンティティを見出す。意思決定プロセスにおいて自身や周囲を理解し、当事者意識と教育のプロフェッショナルとしての責任を見出す。

## 教師のウェルビーイング

世界的な教師不足という課題に対し、教師としての本来の仕事により集中できるための環境支援は、教師のストレスを緩和し、ウェルビーイングを実現することに貢献する。

### 教師の知識

教科担当を超えて、多様な生徒のニーズやAIなどの新しい技術に対する知見を持つ。

### 教師のスキル

専門家として、生徒と社会や、他領域同士を結びつける術を持つ。

### 教師の態度と価値

目的意識やアイデンティティ、新しい教育への探究心を持ち、生徒への強い期待や信頼、専門知識を探求し続けること。

## 基調講演（第23回OECD/Japanセミナー）

# 求められるのは社会変化を伴う教育改革 その礎となる、次世代の3指標

ジョアン コスタ

OECD Education2030アドバイザリー・グループ議長

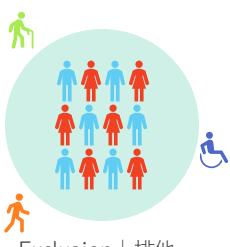
元ポルトガル教育大臣

急速に変化し続ける世界の中で、社会のあり方や生徒のニーズも変化しています。それに伴い教育のゴールも変化していく必要があるため、よりよい教育を模索し続けてきた歴史の上で、今日ではさらなる変革が求められています。その際に有効な3つの指標として、サクセス・インクルージョン・シティズンシップがあります。

### サクセス

統計的かつ数値的な学力や評価の向上ではなく、  
個としての生徒を尊重・理解すること。

教科の枠を越えて、義務教育終了後も  
進路に関わらず必要となる礎を築くこと。



Exclusion | 排他



Segregation | 分離



Integration | 統合



Inclusion | 包括

### シティズンシップ

何を教えるかを検討することは、  
どの側面をどう切り取り伝えるかに大きく関係する。  
個人のあり方や価値と深く関係していくため、  
よりよい社会をつくる慎重な合意形成が重要。

建設的批判を培い対話を促すことで、  
情報を取捨選択し、意思決定を可能にすること。



## クリエイティビティ&クリティカルシンキングの11キーワード

教科やカリキュラムとしてのクリエイティビティやクリティカルシンキングではなく、社会情勢や環境問題など、地球上で何が起きているかに対する様々な知識を統合しながら、クリエイティビティやクリエティカルシンキングを通して、解決策を模索するためのキーワードです。

### #1 THE (OLD) GOOD STUDENT VS. THE (NEW) GOOD CITIZEN

授業態度が良く成績優秀、優れた記憶力や高い再現性など、競争的な環境での個人としての優位性ではなく、チームメンバーとしての意識を持ち、他者と協力しながら解決策そのものをつくり出すこと

### #2 THE OLD SCIENTIST

経済や社会動向を反映させたカリキュラムや教育メソッド、そしてその単なる繰り返しとしての授業ではなく、古代の哲学者たちが日常や生活の中に意味を見つけ世の中に様々な提唱をもたらしてきたように、本質に向き合うための余白を持たせること

### #3 NAVIGATING INFORMATION

情報過多の世界に晒される生徒が、情報を正しく取捨選択できるようになるためには、判断材料となる知識が必要となること

### #4 A NOVEL APPROACH TO METRICS

今後の教育システムについてその良し悪しを見極めるためには、調査結果や影響力を部分的に見るのでなく、これまでの教育を何度も振り返り、全体を俯瞰するアプローチをすること

### #5 DIVERSITY REQUIRES IMAGINATION

効率性や数値の成長を追い求めるだけでなく、イマジネーションを通して他者が持つ権利に思いを馳せ、新たな解決策を生み出していくこと

### #6 ASKING IS MORE DIFFICULT THAN ANSWERING

知的好奇心を活かし、正しい問い合わせ立てること  
同時に、生徒自身が正しい問い合わせ立てられるようにサポートすること

### #7 VALUE THE PROCESS

生徒がどのように結果を導き出したかを重視すること  
特に、予期せぬ状況に直面し、答えがない場合などにも対応できる、プロセスを身につけること

### #8 WHAT DO YOU WANT TO BE WHEN YOU GROW UP?

テクノロジーに代替されなくなることが予想される職業職種が多々ある中で、ヒューマンクオリティ（人間が持つ資質）とは何かを見つめること

### #9 DESCARTES' ERROR

物事を決断する際には、論理や理屈に加えて感情も重要な指標となりうるため、生徒の論理的思考だけでなく、感情・感性やクリエイティビティも養うこと

### #10 DEMOCRACY REQUIRES TIME AND COMPLEXITY

手間や時間がかかるても、議論を通して複雑性を理解し、全体の目標達成につながる様々な解決策を模索すること

### #11 JUST BECAUSE WE ARE HUMANS

人間と他の動物の絶対的な違いとして、人間の言語とアートへの理解があるように、カリキュラムの中でもアートや文化など、人間ならではの感性に目を向けること

## 基調講演（第23回OECD/Japanセミナー）

# OECDティーチングコンパスにつなげる 日本からの提言

戸ヶ崎 勤

埼玉県戸田市教育長・日本OECD共同研究総合座長

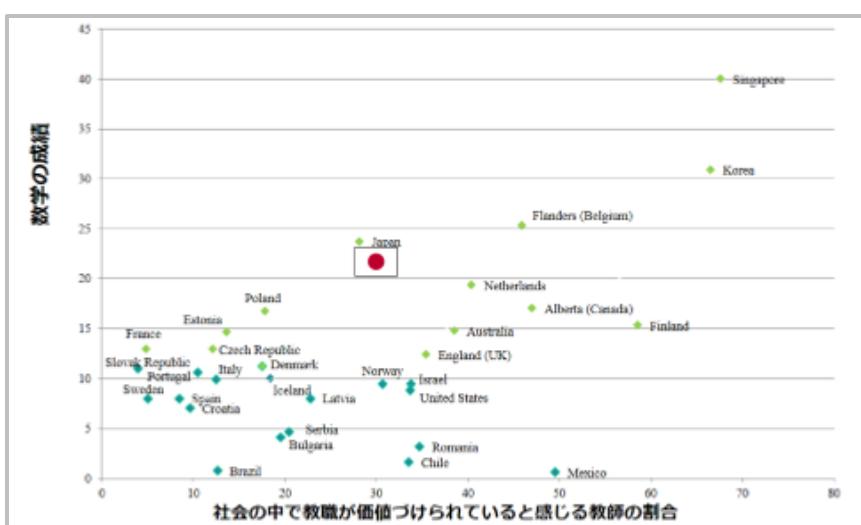
新しい学びにつなげる教育改革のために、国内外の優れた制度や文化を学ぶことは有効ですが、自らがすでに持っているものを無視し、持っていないものに憧れるだけでは、根拠のない不安と危機に陥り改革のための改革になってしまう可能性すらあります。地域に根づいた文化や歴史を継承しながら課題に向き合う試み（これまでの教育の再価値づけ）と、他の事例から学び発展や未来の創造につなげる試みのどちらも重視する姿勢が必要です。

### 知識を教えるだけではない、日本の教育

- ・給食活動や課外活動など、広範囲にわたる教育の提供や学校・地域・社会の連携
- ・多様な子どもたちが共に学び合い教え合うなど、集団を活かした学び
- ・個々に応じた指導や、指導と評価の一体化など、これまでの学習指導の蓄積
- ・教科教育にとどまらない、基本的な生活習慣の指導
- ・教員免許取得済みの専門性がある教師
- ・学習指導要領に基づく教育課程（カリキュラム）により保たれる教育水準
- ・安全安心な居場所・セーフティネットとしての福祉的な役割

### 教師が、社会の中での自身の価値を低く感じてしまっている現状

社会の中で教師が価値づけられていると感じる教師の割合と生徒の学力には相関関係が示されています。しかし日本のその割合は、国際的に比較する低いという結果が出ました。さらにOECDが2018年に実施した国際教員指導環境調査（TALIS）によると、日本の教師の1週間あたりの勤務時間は小学校で54.4時間、中学校で56



時間となり、参加国の中で最長で、平均38.3時間の約1.5倍にものぼりました。また、教師が多くの時間を費やしているのは、授業準備やクラス運営、学校事務などではなく、その他の業務であることがわかりました。

2024年8月、中央教育審議会は、質の高い教師の確保のための環境整備に関する答申を提出しました。答申では、学校における働き方改革の加速、学校の指導・運営体制の充実、教師の待遇改善の3つに、一体的・総合的に取り組む方針が示されています。

# 提言1 教師のエージェンシー 生徒主体の学びを指導・支援

教師のエージェンシーとしては、自身の言葉や文化、理論をひとりひとりの教師が持つこと、教師としての自負とオーナーシップ及び責務の念が重要です。教師と生徒の共同エージェンシーとしては、教師と生徒が共に学び合える信頼関係を築くことがさらなる発展につながります。そのためには支援と指導のバランスが重要です。「教師は指導者ではなく支援者である」としてサポートを強調しすぎてしまうと、教師は指導を控えて傍観者となってしまう傾向があります。指導不足では生徒の基礎が定着しない一方で、教師の強制力が強まってしまうと子どもの主体性が損なわれてしまうという課題が生まれてしまいます。指導と支援のバランスや子どもから学ぶ姿勢へ注目する必要があります。何をどのように学びたいのか（校則含め）生徒が考え、生徒の提案を教師間で共有できるシステム・学校文化づくりを進めている泉大津市立小津中学校の事例や、教科の見方・考え方を問い合わせし教師が全てを準備して教えるのではなく、実社会から生まれる生徒の問い合わせや着想を学びにつなげることで教師の専門性が発揮されるおさんぽメガネワークショップの事例が挙げられます。

# 提言2 教師のウェルビーイング 自己犠牲ではない教師像の社会的理解

教師という職業が子どもや社会の未来を担う重要な職業であるにもかかわらず、教師自身の学びや挑戦の機会が減少しています。献身的で責任感が強いなど、教育に対する意識や思いが強いほど、教師が抱える負担が大きくなってしまうため、教師にとっても持続可能なウェルビーイングを模索していきます。例としては、特に発災時など緊急性が高い場合における教師のケアやAIの活用があります。災害時に教師を派遣する活動をしているEARTH (Emergency and Rescue Team by school staff in Hyogo)など、平時からのコミュニティー化や命を中心に据えた教育を意識することが大切です。また、AI開発者と中高生のコラボなどの事例もあります。学校に様々な新しいツールやプラットフォームを導入することが、学校の負担を強いることになってしまう可能性もあるため、一方的な押しつけではなく産官学で連携することが重要です。

# 提言3 教師の資質・能力ー知識・スキル・態度と価値 生徒の多様な背景を想定する

不登校・海外ルーツ・特別支援や社会的養護を要するなど、多様な生徒への柔軟な対応が教師には求められ、そのニーズは増える傾向にあります。教師が、個々の生徒の状況や感情を素早く察知し、直観や経験に基づいて、その場に応じた柔軟で適切な対応をする能力（教育的タクト）をより一層養うことが、今後のよりインクルーシブな教育現場の実現につながります。湘南市では多様な生徒のニーズにエコシステムで対応しています。また、海外の教育を体験した教師や生徒の眼を通して、日本の教師の強みとこれからを考えることもしています。教育観・子ども観・授業観・評価観など、これまで重視してきた教師の価値を改めて問い合わせし、教師の資質・能力の向上につなげる必要があります。またその際に教育を科学することを目指し、これまで教師個人がそれぞれに磨いてきた技術や感覚をデータと照らし合わせながら言語化することで、より広がりを持ち持続可能な教育に発展していきます。

## 基調講演（第23回OECD/Japanセミナー）

# 日本の教育をもう一度価値づける 知・徳・体にわたる全人的な教育

秋田 喜代美

学習院大学教授・中央教育審議会教員養成部会部会長

日本の学校教育は全国一定の水準を保障しています。PISA2022からも、国際的なトップレベルであると同時に、社会・経済的地位が生徒の得点に影響を及ぼす度合いが低く公正性が高いと示されています。また、**知・徳・体にわたる全人的な教育**で、**知的能力だけなく非認知能力の育成も重視**し、長い歴史を持つ特別活動や授業研究などは国際的にも広く紹介されてきました。さらに、生徒1人につき1台端末が支給されるGIGAスクール構想も効果を発揮しています。コロナ禍において国策として開始され、現在では7-8割の校長が効果を実感。個別最適・協働的な学びや働き方改革、誰ひとり取り残されず全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進（不登校、特別支援、病気療養、外国籍の生徒など）に有効であることがわかつきました。

### 社会と学校が抱える課題を理解することが第一歩

#### 地域の教育力の低下

感染症や国際情勢など  
未来の予測が困難な社会  
少子化・人口減少、高齢化、  
DXなど、急激な変化  
都市化・過疎化による、  
つながりの希薄化

#### 学校の問題の複雑化

生徒が抱える困難の  
多様化・複雑化  
働き方改革の推進と  
学校運営のバランス  
加速度的な情報の進展と  
その対応

#### 学習指導要領の理念

教育課程を介して  
問題を、学校と社会が共有  
生徒の育成すべき  
資質・能力の明確化  
地域の人的・物的資源の活用と  
開かれた学校の展開

### 各地が呼応する、国際指標としてのOECDティーチングコンパス



# パネルディスカッション（第23回OECD/Japanセミナー） 教師のエージェンシーは、 自律力と不可能を可能に変える力



あなたがもし中学生向け辞書の編集者だったとして、教師のエージェンシーをどう定義しますか？また、具体例はありますか？

João Costa  
E2030  
アドバイザリー  
グループ議長  
ポルトガル

自身の行動とパワーをコントロールすることだと思います。それをさらに、自身のモチベーションや自律、意思、エネルギー、クリエイティビティ、選択、責任などと結びつけていくことです。具体例としては、私の同僚教師の話があります。あるプロジェクトでチームとして一緒に動いた際に、その同僚は、事前にタスクの分析を準備してくれていたんです。チームの対話が前に進められるように自発的に考えて、タスクを把握し、事前に行動してくれていたんですよね。

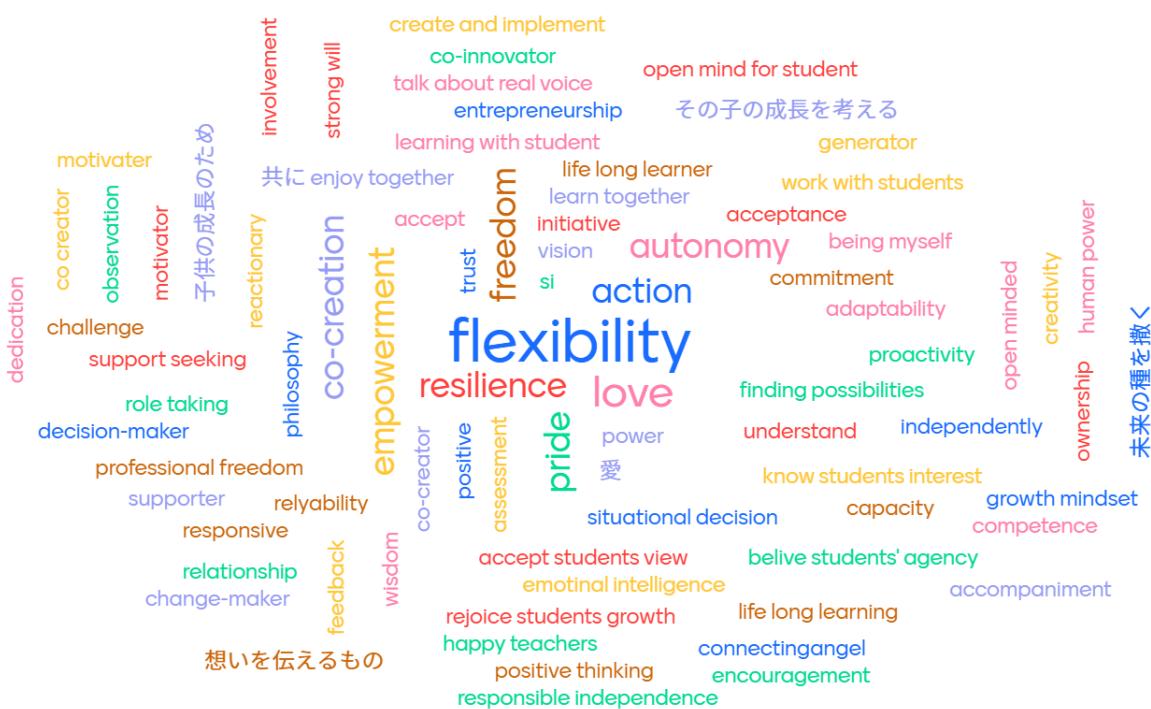


Margit Timakov  
教師  
エヌトニア



Edwin Lim  
教師  
シンガポール

私の場合は、不可能に可能性を見出すことです。私の学校は国際サミットを毎年開催していますが、コロナ禍では、開催を見送ることになりました。そこで教師が、オンライン開催を提案しました。とは言っても、技術的な課題もありましたし、そもそも生徒が画面に向かって集中していられる時間は限られるため、短縮して開催しようという意見もありました。しかしその教師は、ただ開催することより、豊かで意味のある時間にしたいという思いがあったので、生徒とチームを結成し、技術的な課題を一緒に解決しながら、ゲーム性を取り入れた国際サミットを4日間開催することができたのです。架空世界で参加生徒がキャラクターを演じるというものです。実際にそこからミニプロジェクトが多数生まれ、サミット後も学校に多くの変化をもたらしました。教師である私にとってのエージェンシーとは、痛みを力に変え、傷を知恵に変え、弱さを強さに変え、不可能を可能にすることです。



同質問に対し、参加者からも集めたワードクラウドを掲載

## パネルディスカッション（第23回OECD/Japanセミナー）

# 対話から学ぶ時間を残しながら、 生徒が自己主張できる環境を整える



これまでの教育制度や、学校が持つ価値・アイデンティティに関して、これからも残していきたいと思うこと、これから変えていきたいと思うことを教えてください。

João Costa  
E2030  
アドバイザリー  
グループ議長  
ポルトガル

私が残したいことは、部活や学校行事から得られる協力と団結と協調性です。学校生活との結びつきも強く、友だちと協力しながら取り組めるので、協調性を自然に学ぶことができます。学校外の方とのコミュニケーションの機会にもなっています。変えたいことは、間違いを怖がってしまう雰囲気や、自己主張をしにくい空気感です。特に日本の生徒には強い傾向だと思います。



前名拓実  
高校生  
日本

僕が残したいことは、授業内でのグループディスカッションの時間です。みんなで対話しながらアイデアを出し合うことで、見つけられることや成し遂げられることがたくさんあり、その過程で協力することも学べるからです。反対に変えたいことは、日本国内だけで交流が終わってしまっている現状です。今回のグローバルフォーラムを通して、世界に対するイメージが変わりました。遠い場所と思っていたけど、近く感じられるようになったんです。こんな機会がこれからも増えると良いと思います。



三中そら  
高校生  
日本

日本ならではの考え方である、知・徳・体を育む全人的教育は絶対に残したいことです。反対に変えたいことは、日本の教育の良さが国内ですら共有されていない現状です。教育政策は、履修と習得、詰め込みとゆとりなど、二項対立になりがちですが、振り子で言うところの最も運動エネルギーが高い一瞬のポイントを、教育でも見定めていく必要があります。



戸ヶ崎勤  
教育長  
日本



同質問に対し、参加者からも集めたワードクラウドを掲載

# パネルディスカッション（第23回OECD/Japanセミナー）

## 学校で起こり得るあらゆる事態に、 アダプタビリティで対応する



OECDティーチングコンパスで特に強調したいキーワード1つは何ですか？

João Costa  
E2030  
アドバイザリー  
グループ議長  
ポルトガル



戸ヶ崎勤  
教育長  
日本



三中そら  
高校生  
日本



秋田 喜代美  
研究者  
日本



Edwin Lim  
教師  
シンガポール

子どもの権利です。全ての子どもが学び、育つことを保証する権利です。日本では2023年に初めてこども基本法が施行されました。OECDティーチングコンパスにも、子どもが生きる、そして育つ権利の保証を是非入れてほしいです。

1つと言わながらも3つになってしまうことをご容赦ください。まずは、教師という職に対する社会的尊敬です。これは世界的な課題でもあると思います。次に教師のオーナーシップとエンゲージメントの向上です。最後に、教師は高度専門職と言われますが、その自覚とそれに見合うスキルアップです。そして何より、この3つを構成するため、教師人材の裾野の拡大が重要です。

アダプタビリティ（柔軟に対応し適応する力）です。目的を達成するために状況を理解し、どの角度からアプローチするのが最適かを見つけるためにアダプタビリティが重要です。グローバルフォーラムを通して、教育が持つ様々な機会と、教育が向き合うわなければいけない課題を考えました。どんな事象もどの角度から見るかによって、機会とも課題とも取れます。その点で、アダプタビリティは前に進む希望とも言えますね。

柔軟性です。当たり前のことかもしれません、生徒ひとりひとりの特性を理解し、教え方や相談のり方を生徒によって変えながら合わせて対応してくれる先生は、生徒にとってはとてもありがたい存在です。



同質問に対し、参加者からも集めたワードクラウドを掲載

## スペシャルセッション

# 先生のキャリア・パス～海外編～

## 派遣教員OB・OGの今

日本OECD共同研究：在外教育使節ネットワーキング座（座主：三浦一郎、島内理恵子、浦山美代子）と公益財団法人 海外子女教育振興財団によるコラボ企画として「先生のキャリア・パス～海外編～ 派遣教員OB・OGの今」を行いました。

日本人生徒に日本語教育を提供する在外教育施設は、世界に350以上あると言われています。その中でも日本人学校には日本から派遣された教師が在籍し、現地で貴重な経験を積んでいますが、こうした経験が日本国内で十分に活かされていない現状があります。今回の企画では、海外の在外教育施設での教育や文化に対する知見を持つ教師が、日本の学校などの現場指導にも自身の経験を取り入れられるようサポートし、また教師を目指す学生にも海外での教職を身近に感じてもらうことを目指しました。

### 当たり前を崩しながら見つける、それぞれの在外教育スタイル

海外経験を「どこでもドア」と捉え、積極的な国際交流のためにまず開いて行動してみることや、「和をもって個性を解き放つ」「まそび（あそび×まなび）」という信念を持ち日本の教育の良さを残しながら、生徒が主体的に学べる環境をつくること、多様な教育観を持つ教師が自身の当たり前を崩しながら協働していくことなど、元派遣教師のコメントを元に、参加者全体で知見を高めました。

### 「先生のキャリア・パス～海外編～ 派遣教員OB・OGの今」を終えて

#### 共同座主 浦山美代子さんコメント

在外教育使節ネットワーキング座に参加するようになって、2年目。ほぼ隔週、オンラインで定期的に顔を合わせ、最近の自身の近況などの何気ない会話から始まるのが、私たちの定番です。そんな和やかな雰囲気の私たちが、まさかこのイベントのスペシャルセッションを担うなんて、メンバーの誰もが予想していませんでしたし、また正直焦りました。果たしてこの短い期間でできるのだろうか？と・・・。

そこにはまた、OECD共同研究の方々の多大なる温かいサポートと励ましがあったことはもちろんですが、私は、他のメンバーの動きの渦に巻き込まれ、あれよあれよと引っ張られ、ただエールを送っていただけでした。そして実際にセッションが始まってみると、スピーカーの方たち以外でも海外での経験のある先生方、またこれから経験しようとしている方、その経験談を参考にしたい方など様々な方々が国を超えて多く集まってくれたり、こういったプラットホームの必要性を強く感じました。それと同時にスピーカーのお一人のお話にもあった「どこでもドア」のドアを見つけてしまった。

「もう行くしかない！」

私たちは、それぞれの環境で色々な事情があり、立場や方法も多種多様ですが、それでも一緒にスタートラインに立った感覚で、さらなるクエストをゴールまで続ける勇気が湧いてきました。

## 自己紹介

日本OECD共同研究は、OECDラーニングコンパスに基づき、生徒たちがエージェンシーを最大限に発揮し、2030年の世界を豊かに生きていけるように、効果的なカリキュラムの設計・実施の探究について、日本とOECD（Education2030）が力を合わせて取り組んでいる活動です。

現在、Education2030では、OECDティーチングコンパスを国際共創中です。この新しいフレームワークづくりに、日本の皆様と、参画・貢献することを目指しています。

その手法として、壁のないあそび場-bA-は日本各地で、プロジェクト無限大は世界各地で、未来の教育のあたりまえの先取り実装を、展開しています。



2023年3月31日開催  
日本OECD共同研究月間プレゼン資料より

壁のないあそび場-bA-とプロジェクト無限大が最重要視しているのは、生徒と教師や、さらにその周りを取り囲む大人たち自らが課題を見つけ、異なる視点を持ち寄り、対等な立場で解決策を共創することです。

これらを、研究として見取り、日本の教育の再価値付けを行いながら、未来の教育政策への提言を生み出すために、「テーマ別ワーキンググループ」としての政策研究機能も強化しています。

## スピリット

学校は、社会の縮図ではなく未来図

壁のないあそび場-bA-とプロジェクト無限大は、学校現場と教育政策を変えることは、未来そのものを形づくることと考えています。学校は、単に現代社会を反映する縮図ではなく、これからの中社会と未来そのものを形づくる道しるべ。子どもの自主性を尊重し、子どもと大人が共に考え学ぶことが共創につながり、未来そのものの輪郭が明らかになると考えます。

このスピリットに共感する仲間が日本各地や世界各地に広がったことで、より柔軟で臨機応変かつ包括的な新しい教育を追求することができるようになり、そしてそれが、より豊かな未来の実現につながっていくと信じています。

### 主催

東北大学・OECD（経済協力開発機構）・文部科学省 共同開催

### 協力

東京学芸大学

### 後援

外務省

### 共創パートナー（サイトビジット受け入れ協力）

石川県教育委員会・石川県立輪島高等学校

戸田市教育委員会・戸田市立芦原小学校・戸田市立戸田第二小学校

群馬県教育委員会・群馬県立前橋南高等学校

株式会社内田洋行・インテル株式会社

### 協賛・運営協力

算数・数学思考力検定・早稲田アカデミー・栄光ゼミナール

西南学院大学・株式会社エキュメノポリス

さんすう数学あそび座・SAPIX YOZEMI GROUP・株式会社Que



## グローバルフォーラム後の活動

2024年12月9～11日

プロジェクト無限大

学校のウェルビーイングについて国際生徒&教師サミット（フランス・パリOECD本部）

2025年1月

能登追悼ワークショップ

2025年3月

東日本大震災追悼ワークショップ

## ご協力・ご支援・ご参加に関するお問い合わせはこちらまで

東京学芸大学 日本OECD共同研究 国際共創プロジェクト運営事務局 [collective@u-gakugei.ac.jp](mailto:collective@u-gakugei.ac.jp)

「壁のないあそび場-bA-」プロジェクトサイト <https://gakugei-asobiba.org>

このレポートは、日本OECD共同研究を推進する東京学芸大学と  
その共創パートナーが、日本向けに作成いたしました。  
OECDが発行する正式な報告書の日本語訳ではございません。